

# 青木流名物学の真価

馬 彪

## 1 はじめに

名物学とは「物の名と実物とを対照して調べる、歴史とかいろいろの書物に出て居る所の禽獣草木其外物品の名実を辨明する」学問であり、「書物などにいろいろの品物が書いてあっても、実物が何う云ふものであると云ふことが分らなくては、真に書物が分ったのではない」<sup>1</sup>からである。

すなわち、名物学の内包は実物の名実を辨明することであり、その外延は具体的に「歴史とかいろいろの書物」に出ている「禽獣草木其外物品」などさまざまな「物の名と実物と」を対照する研究を指すのである。しかし、学問分野とすれば、名物学はまだ共通理解できるほど確立されていない分野である。私見では名物学は文字学・歴史学・論理学・植動物学・医薬学と「其外」のいろいろな専門分野にすべてかかわるエンサイクロペディア的な特徴がある学問であり、まさに文理融合的な学問といえよう。

また、なぜ名物学は必要であろうかときかかれたら、以下の先行研究の答えを参考するべきである。

「もし物の名が一国内で統一され、しかも時代による変遷が一切なければ、物とその名の間に何の混乱も生じないはずであるが、現実には、物の名が地域や時代によって変わることは少なくない。このように、後世の学者が時代の変遷により導かれた物の名の変化が究明され始めたことで、名物学という学問が誕生した。」<sup>2</sup>というものである。

しかし、近代名物学の先駆者ともいえる青木正児氏に関する先行研究<sup>3</sup>はいくつかあったにもかかわらず、氏より清朝近代的名物学を発見すること、氏の名物学と山口大学との関係、氏の名物学の現在への影響、氏自身の名物学の考証学の特徴などは、まだ課題として残されている。それらの問題を解決しなければ、青木流近代名物学の真価は分からないだろうと思うので、本稿で「青木流名物学」という私の造語を使いながら私見を述べたい。

## 2 青木氏が発見した近代的名物学

先ずは、近代的名物学とはなにか、いつか、どこで、どのように誕生したかという問いを提出しておく。実は、この問題は青木正児（1887-1964）氏までははっきりしてなかった一つの学問史的な課題であった。その課題を明らかにしたのは、氏の「名物学序説」という名著の執筆と公表<sup>4</sup>にあった次第である。

1 これは大正二（1913）年四月、白井光太郎「博物学者としての貝原益軒」という講演の一部である。青木正児「名物学序説」に転載（『青木正児全集』第八巻所収、春秋社、1959年、6頁）。

2 辜承堯「青木正児の名物学研究とその評価について」『関西大学東西学術研究所紀要』51巻、2018年、229頁。

3 これまでの青木氏の名物学への先行研究はエッセーのようなもの多かったが、20世紀末から、いくつかのまともな論文がようやく世に問われた。例えば旧友の張小鋼先生の「青木正児博士の「名物学」と名古屋大学図書館の青木文庫」（『名古屋大学中国語学文学論集』6号、1993年）は「1 青木ノートの基本状況、2 青木名物学の成立とノートとの関係、3 青木名物学の将来とノートとの関係」という章立がある。また注2の辜氏の論文もあり、論文の章立は「1 名物学の研究系譜・中国側、2 名物学の研究系譜・日本側、3 青木の名物学研究の経過、4 青木の名物学研究のアプローチ、5 おわりに」というものである。いずれも大変資料の収集と整理に力を尽くして高論したもので、私に多大な資料と啓発をいただいた力作である。

4 「名物学序説」の執筆と公表年代は『青木正児全集』第8巻所収した当該文の末に「昭和二十一年初稿 ○二十八年夏改稿 ○三十三年秋節録」と書いたので、その時期は1946年～1958年の間と推算できた。

氏の「名物学序説」<sup>5</sup>という名著は、日本のみならず中国においても初の名物学に関する学問史的な作であり、それは「訓詁学としての名物学」「名物学の独立」「名物学の展開」「考証学としての名物学」という変遷を明らかにした考察である。そこから氏は「斯学（名物学を指す—引用者注）は端を名物の訓詁に発し、名物の考証を以て窮極の目的とする、との結論に達したわけである」<sup>6</sup>と定義したのである。

なぜ氏はこのような定義をしたかと問うたら、氏の「考証学としての名物学」という一節に出ている議論をまとめれば、以下のようなものである。

清時代になるとこの学問は「類書と類聚的名物学との分るゝ処は、考証（傍点は氏本人がつけたもの—引用者注）の有無に在る。単に旧説古文献を類聚して、其の取舍選択を閱者に任すのは類書であって、其の採録に編者の価値判断が加へられてをり、換言すれば考証を加へてあれば茲に類聚的名物学が成立し、然らざれば単なる類書に過ぎない。（中略）類聚的名物学は後漢の「釋名」以来歴代行はれた普通の形体であつたが、清代に至り特に或る限られた名物を取り出して研究する、考証学的名物学が興った。其れは經学に於ける考証学の興隆に伴ひ、其の副産物として出現したものと考へられるが、主として礼学に関するものが多い。」<sup>7</sup>とある。

このように、氏の考えは、後漢末から約1500年を経て清代の乾嘉年間に至ると、名物学はようやく類書から編者の価値判断が加えられており、すなわち考証を加える類聚的名物学ができたが、厳密に言えば、当時の名物学はまだ礼学に関するものが多いという段階しか登っていなかったのである。ゆえに、清代の当時に出ている名物学が一体何の学問分野に属すかについては、氏は以下のようにいったことがある。

「されば「毛詩類釋」の如きは優に名物学の域に達し、「詩傳名物集覽」の如きは体例に於て名物学と為すに不十分な点が有り、類書に近しの誹を免れないのである。此の意味に於て第二章に説いた方以智の「通雅」の如きは当然類聚的名物学と見なすべきである。「四庫全書總目」には之を子部 雜家類 に列して隨筆の類と見なしてあるのは虐待である。宜しく之を經部 小学類 に列して「爾雅翼」などと同等に取扱ふべきである。其他、明の周祈の「名義考」十二卷、謝肇淛（ルビは青木氏がつけたもの—引用者注）の「五雜俎」十六卷、王三聘の「古今事物考」八卷の如きも、類聚的名物学と見なすべきである。」<sup>8</sup>

ここで読み取れるのは、一つは「四庫全書」を編輯する考証学者の名人たちにも、氏が提出した類書と類聚的名物学との分ける基準とその意義をまだ意識されてなかったことである。もう一つの大切なのは、清朝の学者が類聚的名物学を經部ではなく子部に入れてしまったことを「虐待」としたほど、氏は名物考証学の真価を知らず学者に不満の意を表した。恐らくこのような不満こそ、氏の自己流の新しい名物学が成立できる前提条件だろうかと考えられる。

しかし、もう一つの問題が出て来た。すなわち、考証学的名物学の誕生は近代的な学問といえるかということである。これについては氏の師としての内藤湖南の説に回答があるので、引用しておく。内藤氏は、

「近来の支那の文化は学問、芸術がその主体になって来たのであるが、その中で学問は清朝の「樸学」が出て来たのが時代を代表する特種のものである。（中略）其の方法は欧羅巴の近世科学の方法に一

5 「名物学序説」、『青木正兒全集』第8巻の「中華名物考」所収、春秋社、7～26頁。

6 同上、9頁。

7 同上、21～22頁。

8 同上、21頁。

致する所が多く」<sup>9</sup>と言っている。ここで言った「樸学」の「方法」とは清代における漢学の考証学方法である。内藤氏によると、清朝の漢学派の主張は、『漢書』河間献王伝にある「实事求是」という言葉に集約されて、とにかく清朝の学者の尊んだのはこの「樸学」である。内藤氏は「講学に対して漢学派ではどういふ事を貴んだかといふと、樸学といふことを貴びました。樸学といふのは、手っ取り早く申せば、自分の部屋に閉ぢ籠って、書物と首っ引きをして、一生懸命に調べ物をするといふに過ぎない。支那では学問をするにも、いろいろ派手な学問もありまして、前にも申したやうに演説を主とする講学もあれば、或は文集を作ったり、詩を作ったりして、世の中に賞められるやうな仕方もある。所がさういふいろいろ世間に名誉を得るやうな、或は世間に流行るやうな学問のやり方を一切捨てて、家の中に閉ぢ籠って学問をするのを僕学と申します。清朝の学者の貴んだのは此の僕学であります。謂はば学問が装飾的でなしに、全く学術としての実用的になって来たのであります。(中略)つまり学問は事実を研究する方からやって行く、空論からやってはいけないといふことであつて、之を清朝の漢学派の人は皆な主張したのであります。」<sup>10</sup>といった<sup>11</sup>。

氏の内藤湖南(1866-1934)氏との師弟関係<sup>12</sup>を考えれば、氏の清代における近代的な名物学を発見したことは、まさに師の清朝歴史考証学が近代科学性があるとの説の遺鉢をつぐ者として、立派な学問的な大発見といつても過言ではない。

つまり、清代における経学考証学の影響を受けて、歴史考証学のみならず、名物考証学も近代科学性があるのは青木氏によって明らかになったのは重要である。

### 3 『名物学緒論』期の青木流名物研究

昭和三四(1959)年六月、氏の『中華名物考』は春秋社によって出版された。その本の「序文」に青木氏は自分の名物学が出来上がった経緯について記したことがある。

「私は還暦停年で京都大学を退く前年、最後の講義に何か変わったものを置土産にと申して、試みたのが『名物学緒論』で、二十一年の四月から十二月まで続けた。何しろ前人未発の試みなので、組織に相当苦勞をしたが、楽しくもあつた。其後二十八年に九州大学から短期の出張講義を頼まれたので、是を機会に旧稿の蕪穢を治め、不足を補つて稿を改め、『名物学通論』を題して之を講じた。其後一たび山口大学で講じ、今又立命館大学で講じつゝある。其の都度多少の修正は加へたが、未だ是を一冊の書として世に問ふだけの自信は持てない。因て今回本書(『中華名物考』を指す一引用者注)を出版するに当り、其の要旨を節録して巻頭に置き、私の謂はゆる中華名物学の体系を公にすることと

9 「新支那論」『内藤湖南全集』第5巻、筑摩書房1972年、536頁。

10 『清朝史通論』、『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房1969年、358～359頁。

11 内藤湖南の清朝歴史考証学の「近代科学性」についての説とその検討は拙論「中国史への「歴史主義」の誤解を解明する「内藤史学」について」『大阪産業大学論集』<人文科学編>第100号、2000年3月、2～7頁を参照。

12 「実証派の内藤湖南」は1907年(明治40年、42歳)に十月、京都帝国大学文科大学史学科(同年、五月学科開設、九月開講)東洋史学講座講師に就任(内藤湖南「年譜」、『内藤湖南全集』十四巻所収、663～664頁)。青木氏は1908年(明治41年、22歳)九月京都帝国大学文科大学支那文学科に入る。狩野直喜・鈴木虎雄両先生及び内藤虎次郎先生に師事(青木正児「年譜」、『青木正児全集』十巻所収、424頁)。二人の関係については青木氏の「内藤湖南先生逸事」に「或る席上にて湖南先生、「冊府(彙文堂が書籍目録を重ねるたる小冊の雑誌一引用者注)が若し後に残つたら、青木君や本田君は先づ彙文堂のかゝへ文学者であつたと云ふことに推定されるだらうね」とある(『青木正児全集』第七巻所収、春秋社、1959年、127～128頁)。また、青木氏に「私が「隨園食單」の存在を知つたのは、内藤湖南先生のお話からである。たしか大正十年前後、盛況を極めた吾々の麗澤社文會の席上で、晚餐の雑談中に伺つたやうに記憶する。」(「隨園食單」譯餘贅語、『青木正児全集』八巻所収、588頁)といった。

した次第である。」<sup>13</sup>というのは、『名物学緒論』から『名物学通論』へ一変して、更に『中華名物考』への完成過程があることが分かった。また、山口大学に務めた時代は『名物学通論』を開講していた時代と重なるので、本論で青木流名物学を氏が山口大学へ来る前の研究を『名物学緒論』、その後の研究を『名物学通論』の研究時代と区分したうえに、『名物学緒論』期と比較検討しながら山口大学で出来た青木流『名物学通論』の研究内容とその特徴を論じる。述べやすいために表 I 『中華名物学考』の各篇名にみられる青木流名物研究の沿革」によって検討をしよう。

まず、氏が名物学を始めた代表作は『中華名物考』に収録した時代は最も古い作品は昭和十八年『「考槃余事」訳本の序』と『「祕傳花鏡」訳本の序』にあたる。さらにその2つの『序』について考察すると、氏の「自序」に書いたように、自分が「名物の研究」を始めた「其の契機」は、昭和十六年に弘文館から出版する「麗澤叢書」の仕事である。当時、叢書にのせる名著を翻訳する担当は「二三後進の学士」であり、奥村伊久良氏には「歴代畫論」を、中田勇次郎氏には「考槃余事」を、杉本行夫氏には「祕傳花鏡」を振り当てていた。したがって青木氏はたびたび氏らのいろいろな名物に関する質問を受けた。それらの質問のなかには例えば「畫繼」雑説に出て居る『籐墩』や「考槃余事」起居器箆箋に出て居る『坐墩』や「祕傳花鏡」治諸蟲蠹法に出て居る『桐油脚』などがある。これが氏の「名物の研究に興味を持ち始めた」ということである<sup>14</sup>。

そして京都大学で昭和二十一年の四月から十二月まで続けていた『名物学緒論』の開講となり、その講義の後、関西学院・立命館大学の時代になっていたうちに、「柚の香頭」「酒觴趣談」「芍薬の和」はぞくぞくと公表したが、表 I に示すように京都大学時代末期S18 (1943) -S22(1947) と関西学院・立命館大学時代S22 (1947) -S24(1949) を合わせて『名物学緒論』時代となったと考えられる。

表 I によってもう一つ分かったのは、『中華名物考』に所収された33篇のなかに、前期の関西三大学で務めた時代における7篇の論文は全体の33篇のわずか二割しか占めない。その内容を検討すれば、「麗澤叢書」訳本の二『序』について氏は「此の二編は人の為に其の著書に序したもので、直接に名物を考論したものではないが、自序にも述べた通り、私の名物研究が、画期的には是から始まったと思はれるので、此に収録して記念とする」と書いた<sup>15</sup>。それによって、氏の名物学の「發端」は昭和16～18年の間に、「麗澤叢書」に収録の中国名著を翻訳する仕事でスタートして、その研究はまだ史料の翻訳と整理する段階にあたるということが分かった。

しかし、その後十九年の「名義瑣談」と二十一年の「柘漿」とは、内容を読んだら分かるようにすでに「直接に名物を考論したもの」となったのは違いない。関西学院・立命館大学時代の1949年（昭和24年）6月（同年12月に山口大学の教授となる）に、数年間の食事に関する雑考をまとめる『華国風味』として出版した。氏は「是が私の名物学建設の第一歩であった」<sup>16</sup>と書いた。

つまり、関西の大学に務めた時代では氏の名物学は、「画期的には是から始まった」「發端」時期・「名物学緒論」を開講していた時期・『華国風味』として出版した」時期をあわせて「名物学建設の第一歩であつた」時期にあたる。「緒論」とは文字の通り、本論の端緒となる議論であるので、1943年「「考槃余事」訳本の序」に「發端」してから1946年「名物学緒論」の開講と1949年『華国風味』の出版としての「名物学建設の第一歩」とはみな青木流名物学の「緒論」段階をあらわす標識であると思う。

13 『中華名物考』「自序」『青木正児全集』第8巻、春秋社1971年、5頁。「自序」の文末に「昭和三十三年十二月洛北出雲路橋東畔の蓬廬にて 青木正児識」と書いたように、この「自序」は氏が昭和三十二年（71歳）三月山口大学を退職して、京都に帰り、四月から立命館大学文学部講師となっていたうちに書いたものである。

14 『中華名物考』「自序」、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、4頁。

15 「發端」、『中華名物考』所収、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、27頁。

16 『中華名物考』「自序」、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、5頁。

#### 4 山口大学で出来た青木流『名物学通論』期

以下に、山口大学に務めてからの名物学研究について検討する。氏の山口大学時代（1950/1～1957/3）とその後の立命館大学時代（1957/3～1964/12）は、氏が開講していた講義名によって表せるよう『名物学通論』期といえると思う。なぜなら、氏の名物学講義は全部で4回開講したうちに、一回目の京大での『名物学緒論』を除いて、他の3回はみな『名物学通論』を題していた。「通論」と「序論」との区別はおそらく氏が言った「旧稿の蕪穢を治め」ただけではなく、むしろ氏の「謂はゆる中華名物学の体系」を作ったのである。そういっても氏の名物学の「体系」は、どのように山口大学に行ってからできたかの問題が出て居ると思われる。

まずは、上述したように氏が山口大学時代の昭和28年に九州大学で出張講義をしたあと「一たび山口大学で講じ」た名物学に関する講義については、筆者は山口大学人文学部に務めているため、「山口大学文理学部文学科専門課程講義題目」を調べてみた。調べた結果に基づいて「表Ⅱ 青木教授山口大学文理学部文学科中国文学専門課程講義題目一覧表」を作成した。表Ⅱのなかで注目すべき時期は氏が九州大学で出張講義した昭和28年後期の翌年の昭和29年から山口大学を退職する前の31年度である。結果として、29年度の開講科目のデータは見つからなかったが、31年度後期に「訓詁学概説」<sup>17</sup>を開講していたことを確認することができた（巻末表Ⅱ参照）。たしかに29年度の開講科目は不明だが、1つの可能性としては氏の「一たび山口大学で講じ」た名物学は31年度の「訓詁学概説」という講義に該当するのではないかと考えられる。なぜなら、第一には氏の「一たび山口大学で講じ」たことを考えれば、昭和30年と31年に開講していた講義の中には、「中国文学史」2回、「助辞用法」2回、「西廂記」2回、「詩経集伝」2回の他、「一たび」開講したのは「元人雑劇」と「訓詁学概説」しかなく、なお「元人雑劇」というのは内容と「講読」の項目とも名物学通論とは全く違うので、残りの「訓詁学概説」しか考えられない。第二には氏本人の「古来の訓詁学を大観するに、名物の訓詁、すなはち名物学が其の重要な地位を占めてゐる」<sup>18</sup>という観点からすると、その「古来の訓詁学を大観する」とは「訓詁学概説」とイコールであろうかと考えられ、その「大観」や「概説」によって名物学通論を講じたといえるわけである。

次は、表Ⅰによって分かったように、『名物学通論』期の論文数26篇は全33篇の八割を占めてのみならず、山口大学で勤める期間内に公表した16篇はまた、26篇の六割を占めることは目立つのであろうか。それは山口大学の時代に『名物学通論』を初開講、しかも二回も開講したのにも関わることというわけである。表Ⅰのデータにはもう一つの注目すべきなのは「緒論」期のほぼ年一篇か二篇かの公表頻度と違い、「通論」期に入ると年3篇か4篇か8篇かの多産となった特徴もある。例えば昭和27年に公表したのは4篇あり、28年に3篇あり、29年に4篇あり、31年に3篇あり、32年に2篇あり、33年に8篇がある。そしてなぜ『中華名物考』に収録した論文は山口大学に務めた時代の作品は総数と公表頻度とも最も高いであろうか。換言すればなぜ青木流名物学は山口大学で著しく成長したかという問題を答えるべきである。上述したような山口大学にきてから『名物学通論』を開かれたという原因もあるが、氏自身が地方の国立大学へきた著名な学者だから、メディアや大学・学部側からの重視と支援に原因があらうかと考えられる。とにかく、氏を含めてのいくつかの回顧録を引用しながら分析して置く。

1つ目は、地元の新聞社とのご縁。青木氏本人にも、「とにかくするうち私は郷国に新設される山口大学に聘せられて、二十五年（1950年、64歳—引用者注）一月赴任した。すると其の翌年、朝日新聞

17 「文学会誌」第七卷第二号1956（S31）、93頁。

18 「名物学序説」、『青木正児全集』第8巻の「中華名物考」所収、春秋社、1971年、9頁。

西部本社の記者が来て、学芸欄に折々投稿してほしいとのこと。私の書く物は新聞には向くまいと断ったが、何でもよいから是非との頼みに、そんならと「香橙」一篇を投じて見た。是が縁になって山口に居る間、折々投稿した。他の新聞雑誌にも書いたので、私の名物学も大分肉が附いて来た。此の辺で一応締切って見ようと思ふのである。」<sup>19</sup>と振り返った。この文字を吟味すれば、新聞社の「何でもよいから是非との頼み」という気持ちはやはり知名度の高い青木氏にたいしての特別待遇だろうか。なぜなら、氏は東北帝国大学・京都帝国大学元の教授、S19年度叙勲二等、授瑞寶章受賞者のみならず、「学芸欄」への投稿が欲しいというのは、やはり氏の名物学研究成果の魅力を感じてきたお願いかと思われる。一方、氏の方はこの新聞社の願を「縁」として「折々投稿した。他の新聞雑誌にも書いた」ことになった。ゆえに、氏の「名物学も大分肉が附いて来た」結果となった。つまり、氏は「山口に居る間」に地元の新聞社とのご縁によって青木流名物学の盛隆期を迎えていたとはいえよう。

2つ目は、山口大学側の積極的な支援。氏は（清）袁枚の「隨園食單」<sup>20</sup>を翻訳した経緯について以下のように振り返った。

「三十一年夏のこと、大阪の六月社の永井君が京都の宅に来て、「隨園食單」を翻譯して頂きたい、（中略）一旦引受けた以上、出来るだけ良い本にしたい。それには先づ原本の良いのがほしいと思って、彙文堂に相談したが、「隨園三十種」本の外は見ることがないと云ふ。嘗て京大人文科学研究所の森鹿三君の机の上に、單行本らしい帙入りのを見かけたことを思ひ出して問合わせみたら、何の變哲もない三十種本の離れだとの答へに失望した。ところが其秋のこと、東京の古書即賣会の目録中に、單行本らしい「食單」が載ってゐたのを、山口大学附屬圖書館、文理学部分館長の上村幸次<sup>21</sup>君が見付けて、試みに取寄せてみたら、幸にも其れが乾隆壬子鐫の原刊本であった。是で私は翻譯に着手する自信を得たのである。そこで暇々に山口大学新購の原刊本と、舊藏の三十種本と、手許の鉛印三十八種本とを對校して見ると、三十種本は誤字が夥しく、鉛印本は妄改が多い。（中略）それは兎も角として、私は右の三本の校勘表を作り、一は以て譯筆を進める上の自己の參考とし、また譯書に附録して世の原文を讀む篤志家の便覽に供した。」<sup>22</sup>

したがって、氏が『隨園食單』を翻訳するため「先づ原本の良いのがほしいと思って」から、京都にある中国書専門の老舗にも頼られなかったが、山口大学の図書館の方に助けられた。中国書の古本なら一般論でいうと、京都や大阪、または東京の方が頼られるはずと思うのは極自然な考えであろう。しかし、氏の場合はむしろ田舎の新設された国立大学こそ、自分の大学の重要な文化資源を大切に守ろうとして、積極に氏を支援したと考えられる。すなわち、もし大学側に特別に重視されなければ、

19 『中華名物考』「自序」、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、5頁。

20 『隨園食單』と名物学との関連性は水谷真成が「青木正児先生の名物学」の冒頭に言及した。水谷氏に『中華名物考』・『中華茶書』および『隨園食單』の三書は、故青木正児先生の晩年の書物である。三書のうち最初の一書は、多年に亘る諸論考を先生自らが「名物学」という学問分野の名の下に包括編次されたものであり、後の二書は、独立になされた訳註作業ではあるが、また先生の「名物学」なる範疇に入れられるべきものである」とある（『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、593頁）。

21 上村幸次氏については山口大学名誉教授の大塚博久先生が「青木博士山口での出講（学部長を含む）は週に二日位であったが、いつも随伴されていたのは、奥様と経済学部から移って来られた上村幸次先生（のち奈良大学長）で当時後河原の校舎は研究室が狭く、二人の教官が使用しておられ、青木博士は春夏秋冬和服姿であった。上村先生が伴僧の如き役割で専攻は「宋元明の古小説、古代笑話の研究」で中国の一般社会の習慣や住居などに詳しく、極めて貴重な存在であった。先生は物故されたが、元来南都（奈良）の仏家の出身であった。語学文献に詳しく、とくに毛利徳山藩の所蔵していた文献を発見した点今にしても、青木博士の最も近い存在であった。」と教えてくれた。

22 『隨園食單』に付録した「譯餘贅語」、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、588～589頁。

東京の古書即賣会に出た『隨園食單』の乾隆壬子鐫の原刊本にそれほどの価値があるとは世の中に知らせられなかったであろう。

3つ目は、青木流の名物学と山口大学文理学部との関係はなにか。小畑龍雄氏に「先生を識る人びとを驚かせたのは、先生が文理学部長に就任されたことだろう。私も先生と世俗的な学部長という役職とはどうも結びつきにくいと思ったが、誰かが懇願して御承諾を得たらしい。(中略)はじめの頃の学生はいつも定員以下だった。第一回の学生は特に少なく、文学科では半数以下、中国文学専攻学生は一人であった。(中略)私たちは先生を会長と仰いで山口中国学会(最初山口支那学会と名づけたが昭和40年ごろから山口中国学会へ改名した—引用者注)を作り、しばしば例会を開いたが、何か御発表をとお願ひすれば、先生はいつでも快諾して下さった。中国名物学の構想を承わることができたのも、懐しい思い出である。」<sup>23</sup>と回顧した。

この文章では『名物学通論』期における氏と山口大学文理学部との関係は、いくつかいえるであろうか。まずは、名物学についての授業について、氏は文科系の学生は割合少なかった時代には、文理学部長としての氏が数多くの理科系の教員や学生と接するのは、文理融合的な名物学の盛になる一原因であろうかと考えられる。この考えについて筆者は山口大学名誉教授の大塚博久氏<sup>24</sup>にお尋ねした。氏は「青木先生の講義に理学科の学生が聴講した姿をみたことは全くない。しかし、理学科長は東京帝大理学部を卒業し、上海自然科学研究所において主として南東中国の植物相を研究し、『石斛』の一種や『ツルサワトラノオ』他数種の新種を発見・命名し、分類学の分野ですぐれた業績を残した御江久夫教授(一九五一年、昭和26)のち、教養部長とは、屢々歓談されているのを目撃している」と教えてくれた。

青木氏の「子規と郭公」<sup>25</sup>という論文の冒頭には「三年ばかり前のことであつたかと思ふが、本学(山口大学)教育学部の山本武夫教授からの質問を受けた。其れは萬葉集に霍公鳥(ホトトギス)は立夏より鳴き始めるのが定りであると記されてゐるが、此事は支那の古典に本づく所有りや否や、と云ふのである。私は未だ聞かざる旨を答へた。それよりも私が不思議に思ったのは、ホトトギスに霍公鳥といふ漢名の当てられてゐることである」とある。

やはり、山口大学文理学部に所属した青木氏は、理学部のみならず他学部の教員とも名物学について切磋することはよくあったと考えられる。

また、青木氏が当時の山口中国学会で名物学に関する発表をしたのではないかと考えられる。それについて、大塚博久先生に確認したとき、「山口中国学会は学部の設立より遅れた1950年(昭和25)4月29日、経済学部講堂で発会総会を開くとともに記念講演会が開催された。運営委員会は中国文学・中国哲学・東洋史・山口女子短(現山口県立大)及び山口高校・鴻城高校などから各1名を選出した。記念講演会として、1.小畑龍夫助教授「明代における郷村の教育・裁判」2.青木正児教授「名物学瑣談」の二氏の発表があり、多くの聴衆が集まった。その後年一回の大会のほか、毎年例会を開き研究発表を行うこととなった。(中略)1952(昭和27)年青木正児博士『葵藿考』であり、1955(昭和30)年理学部生物学御江久夫教授『二三の支那の植物名について』と続く」と分かった。

23 小畑龍雄「山口時代の青木正児先生」(『青木正児全集』月報X、第10巻、第10回配本、5頁)。

24 山口大学名誉教授の大塚博久氏は山口大学文理学部文学科中国哲学専攻で、昭和31年に卒業したので、氏の学生の時代は青木氏(昭和24～32年に山口大学在職)と重なっていた時期があった。拙稿のために氏はわざわざ青木博士が山口大学文理学部での逸話について二通の手紙でご紹介いただいたが、私信にもかかわらず、一部のみ拙文に載せてもよいかと氏に確認したら、ご快諾いただいた。ここで謝意を表します。

25 「山口大学文学志」5巻1号1954(S29)、1～7頁、『中華名物考』所収、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、108～116頁。

つまり、『通論』期間内の会長として青木氏が「名物学瑣談」「葵菴考」という講演・発表のようなかたちで「中国名物学の構想」は小畑龍雄氏らの学会メンバーへ伝えられたと言っても過言ではないと思う。

## 5 「本業外の道楽仕事として」の学問

京大での青木氏の後任である吉川幸次郎氏は青木氏の晩年の仕事について言及した。「晩年の博士は、余事として、中国の食品および器物の歴史に興味をもち、『中華名物考』（昭和三十四年）を代表とし、『華国風味』（昭和二十四年）、『琴棋書画』（昭和三十三年）、『抱樽酒話』（昭和二十三年）、『中華飲酒詩選』（昭和三十六年）『中華茶書』（昭和三十七年）その他の著書があった。必ずしも好事の業でなく、いかなる名の食品なり器物なりは、いかなる実体と歴史をもつか、つまり「名」と「物」との関係を、実証的に究明するものであって、『名物考』の自序に、「前人未発の試み」という。」<sup>26</sup>

氏自身も「私の名物学は（中略）貧弱ながら本業外の道楽仕事としては、聊か会心の笑みの浮ぶを禁じ得ない。私も今は隠居の気楽な身の上、もう是からは是を本業にしようかとも思ふ。」<sup>27</sup>といった。

以上のような氏の晩年、すなわち京大を退職したあと、「本業外の道楽仕事として」いた名物学に関する回顧録から氏自身による名物学への「本業」「本業外」とか、「前人未発の試み」「楽し」とか、山口大学とのご「縁」か、山口大学を退職したあとの「隠居の気楽」などキーワードからなにが読み取れるかと検討したい。

ここで考えられるのは近代に生きているわれわれは「本業」がないと生きられないのは違いないが、でも必ずしも「本業」の方が楽しいとは言えないことも事実だろう。青木氏の場合には「経済」の理由で道楽仕事をやると言っても、「本業」の方がもっと「経済」のためだろうか、また当時と今日とも樸学的名物学の「随筆」だけで日本学士院会員はもちろん、大学の教員ともなることさえ難しいだろう。でも氏は、出世のためではない「道楽仕事」をハイレベルまでやったのは一体何のためかと検討したくて、表Ⅲ「青木正児先生の「本業」と「道楽仕事」（名物学）業績対照表」を作って上げた。その表で以下のいくつかのことがわかったと思う。

先ずは、氏の研究は第一には中国文学、第二は中国文物であり、二者の関係は当然ながら氏が京都大学で学んだことから決まったわけである。大学の主指導教官は狩野直喜であるが、他に幸田露伴・鈴木虎雄・内藤虎次郎（湖南）らにも学んだ。狩野直喜氏は中国学者（中国文学・中国哲学・敦煌学）、幸田露伴は小説家、鈴木虎雄は古典中国文学者、内藤湖南は東洋史学者に学んだことがある。ゆえに、氏は狩野直喜より「正式なる元曲読法」を学び、卒業論文『元曲の研究』を仕上げる。後に、氏は明・清の戯曲史を論じた『支那近世戯曲史』を書き上げ、同書で京都帝国大学より博士号を授与された。すなわち、氏の研究の軸は戯曲研究にある。氏の一生涯での研究成績をまとめた『全集』を通観してみると、第一巻は中国文学思想史、第二巻は中国文芸論・文学芸術考、第三巻は中国近世戯曲史、第四巻は楚辞・元人雑劇、第五巻は李白、第六巻は中華文人絵画論、第七巻は江南春・琴棋書画、第八巻は中華名物考・中華茶書・隨園食單、第九巻は酒中趣・中華飲酒詩選・華国風味、第十巻は芥子園画伝訳となる。いわば、第八巻以外はほとんど中国文学である「本業」であり、わずかの十分の一が「道楽仕事」であるのは違いない。

次は、上述したように、古稀の年となった氏は自分のほぼ一生涯をかけてきた学問を「本業」と「本業外」というように二分している。表Ⅲをみて分るように、たしかに氏の「本業」とは文学、「本業外」

26 吉川幸次郎「青木正児博士業績大要」、『吉川幸次郎全集』第17巻、筑摩書房、1969年、339頁。

27 『中華名物考』「自序」、『青木正児全集』第8巻、春秋社、1971年、6頁。

とは文物とはいえよう。特に「本業外」の名物学は「道楽仕事として」の位置付けは非常に興味津々なのであろうかと思われる。やはり、研究者としての「本業」と「本業外」とも「学」なのに、「道楽」の「学」こそなお一層「楽」なものもある。つまり、価値があればむしろ出世や名誉などの世俗なものに一斉かかわらない研究だから楽な学問であろう。

## 6 青木流近代的名物学の特徴

上述したように青木氏は単なる清朝における名物学考証学の近代科学性を発見しただけではなく、氏がまた何十年をかけて自己流の名物学を取り上げたのも周知の事実である。したがって、氏の名物学は清代の類聚的名物学を超えたかという課題も残されていると思う。

先に結論だけを出しておく。私は、青木氏が歴史書物に出ている物品の名実を辨明するために意識的に考証を加えていた特典こそ、氏の名物学は近代的な学問だといえると思う。

では、青木流の名物学は伝統的なものとどこが違うのかを説明しないとイケないだろう。氏の清代の名物学は礼学に関するものが多い段階を越えたかどうかにかかわる問題であるが、以下の竹内好氏の評価を引いて答えられる。竹内氏は、

「青木さんによると、穀物を原料にした食品を大別して「餅」と「餌」とになるそうだ。「餅」は原料が小麦粉で、せまい意味での餅（この種類は多い。焼餅、大餅、烙餅、薄餅など。時代差や地方差を考慮に入れたら、餅と名がつく食品は数百あるだろう）のほかに、麺や饅頭もこれに入る。「餌」は、麦以外の穀物、すなわち米、黍、粟、豆などを原料にしたもので、糕や団がこれに属する。そして餅と餌とでは、餌のほうが古い。

このほかに、もし強いて分類すれば「<sup>せう</sup>糗=<sup>せう</sup>炒」と「粉」とがあるが、前者は穀物を炒ってから製粉したもの、後者は穀物から抽出した澱粉およびその製品を意味するので、どちらも広義には「餌」に属するという。

こう書くと簡単だが、簡単なのは整理された結果だけであって、それにいたる過程の考証および推論は、きわめて複雑である。なにしろ古今にわたって無数の文献があつかわれており、その網の目をぬって、名辞の変遷と、実体の変遷とが、比較検討されている。名辞と実体とは、一致することもあり、一致しないこともあるから、その考証たるや並たいていではない。そこにまた、考証だけがもつ滋味がかくされているわけだが」<sup>28</sup>。

また「青木さんは戦争中から戦後にかけて、食品に関する随筆をいくつも書いた。食生活の不自由さが、これを書かせたと青木さん自身は冗談めかして語っている。それを集めて『華国風味』という本が昭和二十四年に弘文堂から出版される」<sup>29</sup>といった。

竹内氏の研究に基づくと、私は青木流近代的名物学の特徴は少なくとも三点あるであろうかと思う。

第一は、樸学的研究内容。青木氏の名物学の研究内容は、上述した「食品に関する」一例だけ挙げたが、それこそ氏のひたすらに何かを一点に集中している樸学的な研究実例である<sup>30</sup>。大雑把に計算

28 竹内好「「餅」と「餌」、『竹内好全集』第10巻、筑摩書房、1981年、186～187頁。

29 同上、185頁。

30 細かい研究はヨーロッパ「歴史主義」の弱点として批判されたが、今日中国学界においては研究の「完整性」を追求して一つの課題に集中して細かく深く追及できない傾向を批判したこともある。例えば羅志田氏は「就中国史学而言，追求揭示历史上人与事的“因果关系”，是从20世纪初即开始的希望把史学弄得更加“科学”的努力目标的最主要表现形式。以写论文或专著的方式来表述研究成果，也是20世纪才兴起的所谓“现代”史学研究的一个要素，最容易使人有意无意中试图把人或事表述“完整”，甚至通常还要“评价”。」（『乾嘉传统与九十年代中国史学的主流』，『開放時代』2000年第一期、104頁）と批判した。

すれば昭和19年（1944）に氏の「愛餅の説」から歿の昭和39年（1964）「古代中国の奇食」まで二十一年間にわたっても食についての研究はほとんど「派手な学問」と無縁な「随筆」であり、その研究成果は「世の中に賞められるような仕方」に対してむしろ自ら自嘲したような「食生活の不自由さが、これを書かせた」が、今日から振り替えてみれば、「全く学術としての実用的になって来た」であろう。つまり、研究内容からみると氏の名物学は「事実を研究する方からやってくる、空論からやってはいけないといふことである」樸学的な特徴があるといえよう。

第二は、考証的研究方法。青木氏の名物学の研究方法は考証学としかいえないことである。たしかに竹内氏が「古今にわたって無数の文献があつかわれており、その網の目をぬって、名辞の変遷と、実体の変遷とが、比較検討されている。名辞と実体とは、一致することもあり、一致しないこともあるから、その考証たるや並たいていではない」と評価したとおりである。しかし、氏があまり考証はお得意ではない説もあるが、長沢規矩也氏の回顧録に「雑誌『支那学』の中には、博士の考証的論文もかなり多く収載されている。しかし、博士は、考証はそれほどお得意ではなかったというよりも、その方面には必ずしも十二分の努力—特別な資料の積極的搜索—はされなかったといえよう。ご自分の蔵書や大学の蔵書を中心に、せいぜい知友から借用できる程度の範囲にとどまっていたといえよう。しかし、その範囲の資料はよく活用された。」<sup>31</sup>とある。ここに出ている考証はお得意ではないかどうかの問題は、私は恐らく同時代における王国維氏の研究生涯と似ている処があるだろうと思う。王国維氏はそもそも清朝の秀才だったが、上海にて羅振玉の東文学社で西洋の学問に触れた。早くも、『紅樓夢評論』などの哲学・美学論文を多数発表して、それをまとめて『静庵文集』として出版された。その後『人間詞話』『宋元戯曲考』を著している。1911年、辛亥革命がおこると日本に逃れたあと、師の羅振玉の考証学のとりこになって、学問も哲学・美学・詞話・戯曲学から小学・中国古代史・出土文字学へ変わった。当時の王氏は「先ず小學・訓詁より其基を植える」<sup>32</sup>と後の考証学をスタートした。ゆえに、王国維氏も「考証はそれほどお得意ではなかった」時代があっても氏の考証学の価値には全く毀損なきように、青木氏の考証学の価値を考えればよいと思う。

第三は、「一科の学」の創出。研究対象と方法の刷新によって、一つの伝統的な名物学と一線を引く、すなわち清代の経学的な制度を考証する名物学とは違い、氏の名物学はすでに経学や子学に属するものではなく、礼制から食文化を中心としての文理融合的な学問分野となっただろうかと思う。

実は、青木氏自身が「古来の訓詁学を大観するに、名物の訓詁、すなわち名物学が其の重要な地位を占めてゐるし、また其れから分離独立して一科を成してゐるものさへ有るので、私は特に之を一科の学として取り上げた次第である」<sup>33</sup>と言ったように、氏は名物学を「一科の学として取り上げた」学者であろうかと考えられる。しかし、「一科の学として取り上げた」といっても、「一科の学」とはどのような意味で理解すればよいか。私はそれが司馬遷の「一家の言を成す」と同じ意味で、すなわち青木氏独特の主張や学説を打ち立てたものと読み取れると思う。ゆえに、氏が取り上げた名物学は従来の伝統的なものと違う青木流名物学だと呼びたいわけである。

以上の特徴のように、青木正児氏が「一科の学として取り上げた」名物学は近代的な学問分野との判断ができ、氏がその先駆者にあたったのは違いないといえよう。

最後、竹内好氏のお話を借りて本論を終わりたい。竹内氏は、青木さんは「なにしろ大学者でかつ

31 長沢規矩也「青木先生とわたくし」、『青木正児全集』第1巻月報、4頁。

32 羅振玉に「至是予乃勸公專研國學、而先於小學、訓詁植其基、並與論學術得失、謂尼山之學在信古、今人則信今而疑古。（中略）公聞而懼然、自懟以前所學未醇、乃取行篋『静安文集』百餘冊、悉摧燒之。（中略）其遷善徙義之勇如此。」（『海寧王忠愍公傳』『清代碑傳全集』（下）上海古籍出版社1987、1780頁）

33 「名物学序説」、『青木正児全集』第8巻の「中華名物考」所収、春秋社、9頁。

文章家である。ここにあげた随筆類も、おどろくべき博引旁証であって、しかも退屈を感じさせない。まずは見渡したところ、青木さんの遺鉢をつぐ人は今後あらわれそうにない<sup>34</sup>という感嘆をした。竹内氏がそう感嘆した1970年から今年までちょうど半世紀を経て来たが、われわれ後学はやはり奮起して青木流名物学の真価を知り、氏の時代にほぼなかった考古学の資料を活用して、その遺鉢を継げなければならないかと感じる。

## 7 むすび

以上の論述をまとめればいくつかの結論がある。

第一は、名物学はまだ共通理解できるほど確立されていない分野であるが、私見では名物学は文字学・歴史学・論理学・植動物学・医薬学と「其外」のいろいろな専門分野にすべてかかわるエンサイクロペディア的な特徴がある学問であり、「名」は文科系的な研究対象、「物」は理科系的な研究対象となるので、まさに文理融合的な学問といえる。

第二は、後漢末から約1500年を経て清代の乾嘉年間に至ると、名物学はようやく類書から編者の価値判断が加えられており、すなわち考証を加える類聚の名物学ができたという氏の考えは、清代における経学考証学の影響を受けて、歴史考証学のみならず、名物考証学も近代的科学性があるのが青木氏によって明らかになったのは重要である。

第三は、青木流名物学における『名物学緒論』期は、氏の名物研究の第一段階にあたる。すなわち「画期的には是から始まった」「發端」時期・「名物学緒論」を開講していた時期・『華国風味』として出版した時期をあわせて「名物学建設の第一歩であつた」時期にあたり、後の本論の端緒となる議論である「緒論」段階である。

第四は、山口大学時代（1950/1～1957/3）とその後の立命館大学時代初期（1957/3～1958/12）、氏が開講していた講義名によって表らされる『名物学通論』期は、青木流名物研究の第二段階にあたる。本段階はまた山口大学での盛隆期と立命館大学初期の集大成期に分けられる。その時代の研究はようやく『中華名物学考』という大作の出版という結果となった。その時代の8年間の内7年間にも山口大学に務めていたので、地方の国立大学こそ、青木流名物学がなお一層重視された所以である。

第五は、「本業外の道楽仕事として」の青木流名物学は、氏が晩年を迎えていた内に「置土産」を置く、「隠居の気楽」となる、世俗や名誉に離れる学問を治する喜びを十分味わった「学」は「楽」だという真の研究である。

第六は、青木流名物学は樸学的研究内容・考証的研究方法・「一科の学」の創出という諸特徴を持つ、氏の「本業」の中国文学と共に生きる「道楽仕事」としての、「名」の文科系と「物」の理科系を跨る研究の真価は、近代的な新しい学問分野を拓いたことである。

第七は、青木流名物学の今後を展望すると、後学は奮起して青木流名物学の真価を知り、氏の時代になかった考古学の資料を活用して、その遺鉢を継げなければならないことである。

34 竹内好「『餅』と『餌』」、『竹内好全集』第十卷所収、1981年、筑摩書房、185～186頁。

表 I 『中華名物学考』の各篇名にみられる青木流名物学研究的沿革<sup>35</sup>

番号	職場	時代	京都大学時代末期 S18(1943)–S22(1947)	関西学院・立命館大学時代 S22(1947)–S24(1949)	山口大学時代 S25(1950/1) –S32(1957/3)	立命館大学時代初期 S32(1957/3) –S33(1958/12)
		年代(S)				
1	京大	18年6月	「考槃余事」訳本の序			
2		18年8月	「祕傳花鏡」訳本の序			
3		18年9月	名義鎖談			
4		21年?月	柘漿			
5	関西学院大 立命館大	22年9月		袖の香頭		
6		24年2月		酒觴趣談		
7		24年3月		芍薬の和		
8	山口大学	25年3月			桑落酒	
9		26年10月			香橙	
10		27年1月			綠萼梅	
11		27年6月			荔枝	
12		27年10月			月と兔	
13		27年12月			『支那』と云ふ名稱について	
14		28年1月			唐風十題	
15		28年9月			重陽	
16		28年10月			蘭草と蘭花	
17		29年1月			屠蘇考	
18		29年3月			子規と郭公	
19		29年6月			葵藿考	
20		29年8月			向日葵	
21		31年 <sup>36</sup>			名物学序説	
22		31年6月			茴香	
23	31年9月			八角茴香		
24	立命館大学	32年10月				芝蘭と鮑魚
25		32年12月				『嘯』の歴史と字義の變遷
26		33年1月				懷香賦の序
27		33年8月				名物零拾
28		33年9月				田中博士の橙説を駁す
29		33年9月				蘭芷と芝蘭
30		33年9月				詩經名物考二則
31		33年10月				長門節
32		33年12月				芒草
33		33年12月				懷香握蘭

35 この表は春秋社1959年「中華名物考」（『全集』第8巻に所収）の目次に基づいて作ったもの。

36 「名物学序説」の成立年代については「名物学序説」文末に「昭和二十一年初稿 ○二十八年夏改稿 ○三十三年秋節録」と書いたが、本表には『全集』目次に書いた「名物学序説（三十一年）」とした。

表Ⅱ 青木教授山口大学文理学部文学科中国文学専門課程講義題目一覧表

年代	講義題目						出典
昭和25年	何らかの理由で「課程講義題目」という欄目なし						1950年1巻創刊号
昭和26年	中国文学史	講読 朱熹 楚辞集註(前)	講読 朱熹 詩經 集註(後)				1951年2巻2号107 頁
昭和27年	他分野の「課程講義題目」が載せられたが中国文学分野の分はなし(非開講か)						1952年3巻2号
昭和28年	中国文学史 (宋元明清代)	講読 詩經集伝	講読(後) 古文真宝粹	中国語学概説			1953年4巻2号130 頁
昭和29年	何らかの理由で「課程講義題目」という欄目なし						
昭和30年	中国文学史 (清代後期)	特殊講義 助辞用法	講読 西廂記	演習 詩經集伝			1955年6巻2号96頁
昭和31年	中国文学史 (上代)	助辞用 法(前)	訓詁学概説 (後)	講読 西廂記 (前)	講読 元人雜 劇(後)	演習 詩經集伝	1956年7巻2号93頁

『山口大学文学会誌』に載せる「山口大学文理学部文学科専門課程講義題目」に基づいてしたもの。「出典」における巻と号とは『山口大学文学会誌』のもの。(前) = 前期; (後) = 後期

表Ⅲ 青木正児先生の「本業」と「道楽仕事」(名物学)業績対照表

		「本業」	「道楽仕事」(名物学)
21 歳	1908年 (明治 41年)	9月創設された京都帝国大学文科大学支那文学科に、第1期生として入学。狩野直喜・幸田露伴・鈴木虎雄・内藤湖南らに学ぶ。	在学中、清国の風俗が絵入りで詳説(家屋の構造、室内の施設、家具服飾等)される『清俗紀聞』13巻は自分の欲求に的中したので買った。
24 歳	1911年 (明治 44年)	狩野直喜の指導の下、「元曲の研究」をテーマとして卒業論文を提出。	
31 歳	1918年 (大正7 年)	9月同志社大学英文科講師および平安中学校講師を兼任。	
32 歳	1919年 (大正8 年)	9月同志社大学文学部教授となる。	自分は江戸文学に興味を持ち、山東京傳の『骨董集』柳亭種彦の『還魂紙料』喜多村信節の『瓦礫雑考』『筠庭雑考』に出る風俗器物を考証しているのに心を牽かれた。
37 歳	1924年 (大正 13年)	4月龍谷大学講師を兼任。12月、同志社大学文学部教授を辞し、東北帝国大学文科大学助教授に就任。	
38 歳	1925年 (大正 14年)		東北大学から派遣され、北京に遊学、要望した明版の挿図本の蒐輯はできなかったが、帰国後「望子(看板)考」できた。しかし、北京で「弾弓子」を買って、そこで晋文人の潘岳が「弾を挟んで郊外に出」を思っ「古代の文化は今も民間に生きている」とし、そこで大学から費用を出し「北京風俗図譜」(2019北京東方出版)ができた。
39 歳	1926年 (大正 15年)	8月東北帝国大学文学部支那学第二講座(中国文学)初代教授となる。	3月18日一時帰国。4月6日再び中国へ。上海に上陸。7月5日帰国。自ら「北京風俗図譜」の図説を執筆したかったが「本業の多忙で」志望を果さず。「風俗研究熱も次第に冷え」た。
40 歳	1927年 (昭和2 年)	4月「支那文芸論叢」出版。	
43 歳	1930年 (昭和5 年)	『支那近世戯曲史』により文学博士(京都帝国大学)。	
48 歳	1935年 (昭和 10年)	12月『支那文学概説』出版。	
50 歳	1937年 (昭和 12年)	9月『元人雜劇序説』出版。	
51 歳	1938年 (昭和 13年)	～昭和22年(1947年)鈴木虎雄の後任で、京都帝国大学文学部支那文学講座の教授となる。東北帝国大学教授と兼任。	
54 歳	1941年 (昭和 16年)		中華文化の紹介を目的とする『麗沢叢書』を出版するために、中国典籍を翻訳していた時、若手研究者からの『藤墩』『桐油脚』という物について問を受けたきっかけで、『名義瑣談』という論を発表した。論で『考槃余事』における器具の名、『秘伝花鏡』にでる植物動物の和名を調べたりしたのは氏の「名物学の端緒」となった。

	1944年 (昭和 19年)		戦時の食糧事情であった窮乏の中に、「学海」という雑誌に七月号の「愛餅の説」、十一月号の「匙で飯を食べた支那の古風俗」を発表。
	1945年 (昭和 20年)		「学海」四月号の「餛飩の歴史」、六月号の「焼筍」等を発表。
59 歳	1946年 (昭和 21年)		名物学の研究については、「私は還暦停年で京都大学を退く前年、最後の講義に何か変わったものを置土産にと思って、試みた「名物学緒論」で二十一年の四月から十二月まで続けた。」
60 歳	1947年 (昭和 22年)	京都帝国大学教授を退官。関西学院大学および立命館大学講師となる。	
61 歳	1948年 (昭和 23年)		発表した「琴棋書画」の文末に「此の一篇を草し、之を売って原稿を買ひ、雑文でも書いて配給米に換へることにしよう」と述べた。
62 歳	1949年 (昭和 24年)	同大学講師を辞し、山口大学文理学部教授となる。	6月、数年間の食事に関する雑考をまとめる『華国風味』として出版した。氏は「これが私の名物学建設の第一歩であつた」と位置づけている。氏は前人未発の試みなので、組織に相当苦勞をしたが、楽しくもあつた」とした。
63 歳	1950年 (昭和 25年)	1月『清代文学評論史』出版。10月同大学文理学部長を歴任。	10月『酒の肴』出版。
67 歳	1953年 (昭和 28年)	10月日本学士院会員となる。	九州大学出張講義のため、旧稿を改めて「名物学通論」を講じた。その後一たび山口大学で講じた。
71 歳	1958年 (昭和 33年)	山口大学定年退官後、立命館大学大学院の特任教授となる。	「名物学通論」を講じた。 12月「自序」に「私の名物学は…貧弱ながら本業外の道楽仕事として…私も今は隠居の気楽な身の上、もう是からは是を本業にしようかと思ふ。」(春秋社1959年『中華名物考』「自序」、『全集』第8巻p6)と書いた。
77 歳	1964年 (昭和 39年) 12 月2日	同大学院での講義終了直後、同大学校内廊下で心不全により急逝。遺著「李白」	「古代中国の奇食」を「あまカラ」154号で発表

本表は『中華名物考』（春秋社）1959の「自序」、『青木正児全集』第10巻に収録されている「著作目録」「年譜」、吉川幸次郎「青木正児博士業績大要」（『吉川幸次郎全集』第十七巻所収）などに基づいてしたもの。

#### 後記：

本稿の校正中に、中国社会科学院文学研究所研究員の揚之水氏が名物学の範疇や研究方法について論じている以下の観点を知ったため、追記しておく。

「名物研究不需要给自己划限，从名词考证来说，它属于训诂，算语言文字的范畴，可是你面对文物、面对器物，传世或出土的，便又属于文物考古。至于文物，不论图像还是工艺品，它又属于美术或工艺美术。涉及政治制度、历史文化、小说戏剧，又是文史的范畴，实际上很难为名物研究划定界限。（中略）我所作的“名物新证”研究，它是边缘学科，也是跨学科，而对于考古学与文学研究都有一定的启发意义。近二十年的研究中，我用这一方法解决了不少具体而微的问题，如文物研究中无法确定物之名称、文学研究中无法确定物之样态的各种问题。我的工作因此可以分作两个阶段，第一是引进，即把文物考古学和图像学方面的成果引进文学研究；第二是输出，即把文学界的研究成果推向文物考古界。」（王楠王敏庆「改革开放四十年来的名物学—扬之水访谈录」、中国社会科学院文学研究所古代文学学科编 刘跃进《古代文学前沿与评论》第五辑、社会科学文献出版社、2021年01月，51～71页。）